

「色」を詠み込んだ冬の句に学ぶ(その1)

今瀬 一博

秀句に詠まれた「色」の効果について「春」から書き進めてきて、前回「秋」まで行きました。季節も冬へと入りつつある今回からは、「色」を詠み込んだ「冬」の句の鑑賞を通して、色の用い方とその効果などについて考えてみたいと思います。

今回作品を抽出しながら、冬枯れの風情や蕭条たる景、厳しい寒さや澄み切った空気といった「冬」のイメージが、色の表現によってどう変わり深まるのかを見るのは楽しい作業でした。

色の多さでいえば「青(蒼)」、「赤(紅)」、「白」を詠み込んだ句が多い印象で、その他には「黒」、「紫」、「紺」、初冬の作品には「黄」を詠んだ作品も多かったように思います。また、「息白し」、「白鳥」、「赤蕪」、「冬青空」のように季語に色がそのまま入っているものもありますが、「人参」や「葱」のように色が際立っているものは、やはり色に着目して詠んだ作品が多いですし、季語によっても、その場所や周囲の気候等の影響もあって色を詠みやすい季語はあるようです。「石路の花」や「竜の玉」、「蜜柑」、「寒椿」等はその例でしょう。一方で色を詠み込むのに適さない季語があることもたしかです。

では、今回は色や色の系統ごとに作品を紹介することを基本的にしつつ、冬の深まりに沿って初冬の作品から順を追って鑑賞して

みます。その方が一句の中の色の効果と味わいについて、深く鑑賞できると思われます。

立冬のあとの青空 松葉降る 阿部みどり女

「松落葉」は夏季ですが、立冬を過ぎてはなお降るのでしよう。いよいよ冬に入ったという心で見える初冬の青空が、「松葉降る」景をより印象的なものになっています。「あとの」が「青空」を引き立て、冬青空の広がりの中、天から松葉が降ってくるようです。

むさしのの空 真青なる落葉かな 水原秋櫻子

秋櫻子のこの句も、冬の青空を詠みますが、場所が「むさしの」に限定されます。しかも「青空」でなく「空真青」ですので色が強調され、空に深さが生まれるようです。この空の深さは「落葉」に象徴される「むさしの」の深さ、豊かさや響き合います。

冬空やキリンは青き草くはへ 森田 峠

峠の句は、前の二句同様冬空を詠みますが、「青空」ではなく、「青き草」を詠んでいます。色は緑でしょう。「冬空」を「や」で強調し、そこに長い首のキリンが銜えている「青き草」の高く鮮明な色を詠むことで、空の広がりや透明感を出しています。

葛飾の土は黒しも麦芽ぐむ 五十嵐播水

播水の句に詠まれているのは、土の「黒」です。場所も「葛飾」と限定しています。播水は兵庫県出身で医師を生業としていたから、「葛飾の土」の「黒」は印象的だったのかも知れません。「黒」で麦の芽の強さが際立ちます。昭和の葛飾の景でしょう。

小春日や潮より青き蟹の甲 水原秋櫻子

秋櫻子の句は「小春日」が季語ですが、冬の寒さが一時緩むこの季語の季感が句の中でうまく働いています。だから、潮に濡れた「蟹の甲」の色がより深いものに感じられるのでしょう。

くれなるに蕎麦を刈り伏せ野の小春

皆吉 爽雨

爽雨の句も季語は「小春（日）」で、季語の季感が作品の中で働いています。山間の野に刈り伏せられた「蕎麦」。その茎に差す赤みが重なって「くれなる」に見えたことにも納得がいきます。

葱白く洗ひたてたるさむさかな

松尾 芭蕉

「葱」の「白」を詠んだ感覚的な作品です。「かな」の付いている「さむさ」に一句の主眼があるので、こちらが季語でしょう。洗われて白を際立たせる葱の輝きが「さむさ」を引き立てます。

海くれて鴨のこゑほのかに白し

松尾 芭蕉

一方芭蕉にはこの句のような感覚的作品もあります。「海辺に日暮して」と前書きのある著名の作です。「鴨のこゑ」を「ほのかに白し」と断定する詠み方をこの時代にしたことに驚きます。

葱白しまことの冬になるほどに

鈴木 道彦

道彦は江戸後期の俳人。加舎白雄門。芭蕉の「葱白く洗ひたてたるさむさかな」同様、葱の白を詠みます。やや理が勝った印象の句ですが、その「白」を「冬」そのものと感じたのでしょうか。

浮寝鳥覚めて失ふ白ならむ

後藤比奈夫

先程紹介した芭蕉の「海くれて」の句同様、水鳥を「白」を感覚的に詠んだ作品。ただこの句は、「浮寝鳥」の色を詠みます。水に浮いたまま眠る「浮寝鳥」の静かな姿は白が際立っていることに気付いたのです。動けば忽ち紛れてしまう羽の「白」です。

みかん黄にふと人生はあたたかし

高田風人子

「みかん黄に」ですから、色付いてきた「みかん」でしょう。「人生は」の大仰さも、「みかん」の「黄」に触発されて、心に「ふと」浮かんだ感慨なら納得。明るい健康的な「黄」です。

朱よりもはげしき黄あり冬紅葉

井沢 正江

この作品の「黄」は、「冬紅葉」の色の描写ですが、「朱よりもはげしき黄」と見て取った正江の感性に驚きます。「紅葉」の赤は眩しく映りますが、燃え残ったような「冬紅葉」は、むしろ明るい「黄」こそ激しく燃え立つことに驚いたのでしょう。

蝶の黄を淡しと思ふ石路の花

五十嵐播水

黄色の蝶が飛び、庭には同じ黄色の「石路の花」が咲いています。掲句も植物の「黄」を詠んだ作品ですが、「蝶の黄を淡し」という表現で「石路の花」の色を間接的に伝えます。直接花の「黄」は詠まず、気品ある艶やかな黄色の花が見えてきます。

静かなるものに午後の黄石路の花

後藤比奈夫

この比奈夫の作品も「石路の花」を詠んでいます。この花の咲く庭の風情を端的に詠んだ作品だと思います。「静かなるもの」という「石路の花」の冷静な把握、「午後」という時間の設定。端正に詠みつきつぱりと断定する強さがありますが、不思議に納得がいきます。黄色の花を黄色と詠んでもどくありません。

石路咲いていよいよ海の紺たしか

鈴木真砂女

やはり「石路の花」を詠んだこの句は、黄色は出さずに、海の「紺」の「たしか」さを詠みます。この「石路の花」は庭に咲くのではなく海辺に自生しているのかもしれない。海の紺をきりと引き締める強さが、この花の「黄」にはあるのでしょうか。

深々と沈みて碧し竜の玉

野村 喜舟

喜舟のこの作品は、「石路の花」同様、日のあまり当たらない庭の隅などにある「竜の玉」を詠みます。青い玉を「碧し」と詠みますがどくありません。「深々と沈みて」という忠実な描写が効いているからでしょう。「竜の玉」の「碧」が際立ちます。